

価値観研究プロジェクト

Value Study Project

ICU卒業生の生き方の価値意識の追跡面接の検討に続いて、卒業生の職業的価値意識の分析を行っている。発達的には成人前期にあたる社会人の職業的価値意識についての先行研究は少ない。そのためまず価値構造を明らかにして、卒業後の職業や生活の経験からその特徴を明らかにすることとした。

大学在学中の職業的価値意識については、「職業に就くこと」に関わる面接記録からその意味付与（価値の志向性）の特徴を捕捉して、現実志向（行動性次元）、自己志向と社会志向（精神性次元）の3つの価値志向モードを明らかにした。また現実志向では「生活」と「活動」、自己志向では「自己形成」、「自己規定」と「自立」、社会志向では「社会的帰属」、「社会的責任」と社会的貢献の各価値パターンが明らかになったが、その他に進路決定にコミットしていない「模索」と「回避」が析出された。以上の分析から価値構造の構造化を図った（栗山・大井, 2007: 2010）。

そこで、追跡データ（大学卒業後3-4年の13名と7-8年の8名、追跡率は32%）でもこの価値構造を解釈枠として、在学中の分析に準じた方法でスクリプトのカテゴリ化を行った。2つ以上のカテゴリを挙げている場合は順位をつけて集計した。その結果、1位と2位の価値パターンにおいて、現実志向の「活動」の価値パターンはみられなかった。すでに社会で活動しているためであると思われる。また新たに加えるカテゴリもなかった。1位のカテゴリでは現実志向の「生活（例：生活費を稼ぐこと、生計手段）」が43%で最も多く、生活者としての価値意識が顕在化したといえよう。一方2位のカテゴリでは「自己形成（例：好きな仕事とかやりがい、自分を成長させたい）」が55%で最も多く、「自己規定（例：生きる上で必要なこと、義務、きちんと働いて税金を納める）」とあわせて73%が自己志向であった。1、2位のカテゴリは背反であるため、両者を合わせて価値志向性を検討した結果、自己志向が50%で最も多く、次いで現実志向が31%、社会志向は19%であった。

在学中の職業的価値意識は希望観測的で観念的であるが、卒業後においては実際の就業体験によって現実的にならざるを得ない。また就業経験のない進学者においても、特定の職業を目標とした専門性の高い学びの環境で将来の職業に就くことの意味を現実的に捉えていると考えられる。一方、発達の観点から成人前期では今日の社会構造とそのシステムや人間関係の多様な局面に関わりながら、社会的アイデンティティを捉え直して自己を再構築する過程にあると考えられる。このことから職業的価値意識の志向性は現実志向が顕著になるとともに自己志向の特徴が明らかになったと考えられる。

卒業生の進路については最初の就職先に勤続中（産休1名）7名、転職して有職2名、転職して無職2名、司法試験準備2名、大学院進学在学中4名、その他4名は就職後に進学（海外含む）や出産準備中など、そのキャリアは多種多様であった。卒業後の社会環境や現在の個人の帰属状況によって職業的価値意識は個々に異なっていると考えられるためさらに質的な分析を行って、人間発達の観点から検討を進めたい。

栗山 容子
KURIYAMA, Yoko